

憲法と映画(101)『花嫁はどこへ?』

の



インド映画と聞くと、上映時間が3時間はざらで、集団での歌や踊りが必ず入るという固定観念に囚われていませんか。この作品は約2時間と至って常識的な上映時間です。もちろん歌や踊りもありません。

満員列車に揺られて花婿と一緒に彼の嫁ぎ先の村へと列車で旅立つのですが、たまたま同じバールで顔を隠した別の花嫁と相席になったのが過ちの始まりでした。夜遅く目的の駅に着き慌てて花婿が花嫁の手を引いて降車し村に着いてバールを取って顔を見ると全くの別人ではありませんか。一方、寝入ってしまった当の花嫁は、9駅先の駅で別の男性に促されて降りたもののこちらも結婚相手と違うので、駅で見捨てられてしまいます。

携帯電話がほぼ普及している日本ならばお互いすぐに連絡を取り合ってその日のうちに問題は解決してしまいましたが、花婿も花嫁も携帯電話を持てるほど裕福ではありません。頼みの綱は地元の警察なのですが、お金を積まないとともに搜索してくれません。果たしてそんな二人が再び出会うことができるのか……。

映画に登場する人たちは、結婚詐欺を企む男以外みんな優しく親切です。駅で捨てられた花嫁を助けてくれるのは、駅の売店を営む女主人です。花婿の友達たちは花嫁を見つけてくれるように何度も警察に掛け合ってくれます。賄賂をもらうことしか関心ないと思われた警察署長は、取り違えられた別の花嫁が結婚詐欺で騙されたことが分かり、詐欺集団から彼女を救い希望する大学への進学をそっと後押ししてくれるのです。

映画は2人の花嫁をとおして、インドという国がいかに女性の人権を軽視しているかを暗に告発しています。そして女性の自立や幸せの在り方を見事に描いています。

インドの人口は14億人を超えて世界一ですが、家族が選んだお見合い結婚が8割を超えています。21世紀の今も「カースト制度」が脈々と蔓延っていて、世襲制の職業と結びついた約3,000の集団があり同じ集団同士でないと結婚できないのです。